

G-2 多賀城市八幡地区

2011年11月21日(月)

報告者名	菊地 暁	被調査者生年	1945年(男)
調査者名	菊地 暁	被調査者属性	元警察官
補助調査者	沼田 愛		

話者家について

八幡には何軒か話者家があるが、親戚関係は特にない。ウチの分家は横浜にあるだけ。相当昔のことだが、話者家で家が途絶えそうになったことあり、話者家から養子を迎えて家をつがせた。それで話者家が本家になっている。過去帳を見ると、初代が天保3年(1832年)に62歳で没、3代目が明治30年に71歳で没、4代目が昭和5年に74歳で没、5代目、話者の祖父A氏が昭和47年に没、6代目の父B氏は大正6年生まれで平成8年に没。7代目の自分(話者)は昭和20年生まれ。

話者家は天童氏に付いてきて八幡に入ったのだと思うが、伝え聞いてだけで、文書もない。今の仙台市の裁判所に天童家のお屋敷があり、話者家は幕末まで留守居役を務めていた。戊辰戦争に際してはヒイジイサンの兄弟が田原坂でも戦っているし、榎本武揚に従って咸臨丸で北海道に向かい、手紙1通よこしたきりで消息がわからなくなった兄弟もいる。ヒイジイサンは、おそらく四男だろう。

話者家は維新後に食い詰めて、所領のあった八幡に下向することになった。都会暮らしのヒイジイサンはその時初めて田んぼを見たという。最初は、天童のお屋敷の近く、今マンション(ニューライフ馬場)があるところに屋敷を賜った。そのあたりは草刈家など、天童の家臣が集まっていた。ところがその場所は洪水の被害が度重なったので、大正の頃、現在地に移った。その時の証文も残っている。この土地は古地図にある光徳院の跡。移り住んだ屋敷には扉戸がなく、ムシロが下がっていたという。それくらい貧乏だったのだろう。

祖父のA氏はもともと医者になりたくて東京へ逃げ出したのだが、結局は小学校教師になった。父も教師で最後は中学校の校長を務めた。おじは塩竈高校に勤めた。自分は警察官で退職して2、3年になる。息子も警察官になっている。

A氏は郷土史家でもあった。山形の天童と八幡の天童の関係を調べたのはうちのジイサンが最初。八幡の天童さんは知っていたのだろうが、負けて逃げたというのであまり言いたくなかったのだろう。『末の松山鐘のひゞき』という郷土史の冊子を書いており、前書きに郷土史を調べた経緯を記している。多賀城町の文化財の委員も務めていた。

A氏は、天童家の人が家に来ると、這いつくばるぐらいに頭を下げて「わこさま、わこさま」といっていた。「わこさま」って何のことかと思っていた。昔の感覚が抜けきらなかったのだと思う。

話者家の屋敷と暮らし

現在の家がある場所は、もともと光徳院という寺小屋があった。それに因んでジイサンの戒名にも光徳院を入れている。何かの工事で掘り返した時、湯殿山や月山と書かれた大きな石碑が出て来たが、埋め戻してしまった。

このあたりの地主は鎌田家。現在のフードセンターワダヤの場所に住んでいた。今は余所に住んでいる。ウチの隣のC氏はその分家。名主役を務めていたようで、農家を差配していた。D氏は多賀城町長も務めた。土蔵があるのは、鎌田家と草刈家と馬場家の3軒。とりわけ鎌田家の土蔵は立派で、カギも南京錠ではなくとても大きなものだった。戦後、農地改革で土地をもらった小作人の家が現在も続いている。

この家は2階建てで替えている。自分（話者）が生まれた時には茅葺きの平屋で、柱が太くて人が隠れるほどだった。台所と厩が一緒で、入口では鶏を、土間では馬を飼っていた。お化け屋敷みたいで、トノサマガエルでもヤモリでもイモリでも何でもいた。

あたりの家もみな茅葺きで、瓦葺きなのは米屋のF氏の家ぐらいだった。子供の頃に茅葺き屋根の葺き替えを1、2回やった。茅は川沿いに生えていたものや、鳴瀬から運んだものを使った。茅を止める縄を通すために竹串を使うのだが、小さい頃、中からその竹串を受け取る役をさせられ、竹串が目の前にきてびっくりしたことがある。だいたい一週間ぐらいかかり、煤が出て真っ黒になる。

壁は土壁で、藁をきざんでまぜていたので地震でも割れにくい。外まわりの壁は、もともと土壁だったが、よく崩れるので、瓦を入れて作り直した。小さい頃は、屋根を葺くとか壁を塗るとか、職人さんの様子を見たものだ。

板倉は明治の初め頃のもの。糶を貯蔵しており、ネズミ避けがあった。最初は板葺きだったが、大工仕事が好きだった父が瓦に吹き替えた。門は昭和30年の始め頃、仙台から移築したもの。取り壊されるのを惜しんだ父がもらってきて、屋根まわりなども父が補修した。立派な門なので、お寺さんと間違っって入ってくる人がいる。

話者家は田畑も多少は持っていたようだ。八幡小学校や八幡神社はほとんど梨畑で、梨を仕入れて売りに行ったとも聞いている。砂押川で泳いでシラウオを獲ることもあり、シラウオはお正月の雑煮に入れた。

小学校4、5年までは乗馬を飼っていた。馬を洗うのは自分（話者）の仕事で、砂押川に入れて洗った馬に背中を見せると鼻をつけるなどのいたずらをする。腹が立ったので鼻の頭の毛を抜いてやった。（高台にある）この家には、水が上がってくるとみんな馬をつなぎに来た。あたりの草を食べさせた。

地域のようすと天童家

45号線から先は何もなかった。八幡神社がぼつんとあっただけ、その先に海軍工廠跡地があり、遊びに行っって掘り返すと機関銃の部品などが出て来た。米軍機が海軍工廠を爆撃に来たことを母が語っていた。

この辺りは、宝国寺から土地が高くなって山になっている。住む家も昔からあまり変わってい

ない。海軍工廠造成の際はここの山を崩して埋め立てをした。仙台空襲の際はそこから仙台市内の燃える様子が見えたという。

八幡は喜太郎神社横の通りを境にして、砂押川上流の地域をウエノイ、下流の地域をシタノイという。イは家をさす。八幡保育園のあたりはスナッパラといい、砂と土がまざった土壤になっている。天童家の周辺はオカマイという。「お上の家」がなまったものだろう。天童家は3回ほど火事になっており、今は普通の家だが、もとはもっと殿様らしい立派な屋敷だった。

天童家の家臣たちで備荒倉組合というものを作っていた。家中は農家が多く、仲間で粃を出して助け合ったのではないかと思う。その集まりが一年に1度あって、小さい頃には正月か2月か3月に、寄り合いをしてあんこ餅を食べた。宿は持ち回りで、天童家は名誉職というか別格の扱いだった。

備荒倉組合は冠婚葬祭にも関わった。組合で御膳やお椀も持っていた。葬儀があると、穴掘り、位牌を持つ人、祭壇を担ぐ人などの分担を組合で決めた。自分が小学生ぐらいの頃までは、棺は殿様の乗った駕籠に入れて担いだ。駕籠は今でも宝国寺本堂の上のほうにある。葬列を務める人は、袴羽織だったので、モモダチにした（袴の裾をとめる）。袴の紐は普通蝶ネクタイのように結んだのを、横に十文字に結んだ。中は普段のアワセで、上から羽織りだけ着たのだと思う。お寺に入った後、葬列が4回まわる。葬儀が終わると、履いていた草履はお寺に脱ぎ捨てていった。仙北では葬列に旗を立てたりねじり鉢巻きをするところが多いが、このあたりではしなかった。実際に葬列を務めたのはジイサンまでで、オヤジも自分もやったことがない。ジイサンの葬儀は葬祭業者に任せた。

現在、八幡には宝国寺と不磷寺の2つの寺があり、いずれも臨済宗。不磷寺のほうが古い。宝国寺には天童家の位牌があり、たいへん大きい。「慶長〇年」と書いてあり、ジイサンに連れられて見せられたが、よく読めなかった話者家も八幡に移ってからは宝国寺の檀家になっている。墓地は奥が古く、手前が新しい。

刀鍛冶

不磷寺の左隣に有名な鍛冶屋があった。もともと美濃から来て、仙台藩のお抱えになったらしい。銘は白龍子永繁と見龍子永繁といい、十数代続いたと思う。維新後、失業して野鍛冶になった。よく切れる評判で、近在近所から注文があった。塩竈神社にも刀を奉納している。

ウチのバアサンが産婆をしていた時、用心のために守り刀を作ってもらった。自分が小さい頃は引出に仕舞ってあり、ひどく錆びていたが、最近研ぎ直してもらって立派なものに戻った。

バアサンは終戦後に亡くなるまで産婆をしていた。自分もバアサンに取り上げられた。このあたりは工場に連れて来られた朝鮮の人も多かったが、その人たちからも信用され、子供も取り上げていた。朝鮮の人は酒がなかった頃、自分で作っていた。今も飲み屋をやっている人がいる。

年中行事など

話者家は八幡神社の氏子。なぜ田んぼの真ん中に神社あるのか、小さい頃は不思議だった。もともとはこの近くにあったらしい。八幡神社のお祭りで幟を立てるとき、手伝わされた覚えがある。ジイサンは八幡神社の流鏝馬も務めたいが、自分を見たことがない。流鏝馬の的も残っ

ているという。今はF氏が氏子の取りまとめをして、寄付金などを集めている。神主はG氏。大きな家に住んでいる。神主さんとは呼ばずホウインさんと呼んでいる。八幡神社だけではなく、よその神社の神主も兼ねている。

喜太郎神社は、天童さんが八幡に落ち延びる時、道案内した人がキツネになったのを祀っているという。昔はお祭りがあったらしいが、今はない。人が変わってなくなったのだと思う。近所で工務店をしているH氏が管理している。

家の神棚は、昔はもっと大きかったのだが、建替えの際に縮めた。ご神体も寸法が合うよう作り直した。神棚には、天照大神、塩竈さん、愛宕さんのお札、事代主さんの絵像、恵比寿（大黒）像などが祀られている。注連縄は、正月前に縄は買ってきて、紙幣などを自分で付ける。年始は塩竈神社に行く。

宝国寺では数珠回しがあり、3、4メートルの数珠を回した。念仏講もあり、バアサン連中が十数人でやっている。ウチのババも鉦を叩いていた。お正月の頃、チャセゴと称して各家を回っていた。

震災

話者家の住所は地盤が岩盤になっており、少々の地震でも問題ない。高台のため、津波も坂道の途中までだった。津波は、仙台新港から来たものと貞山堀から来たものが合わさって押し寄せた。一番心配したのは砂押川で、よく堤防が切れていたのだが、今回はなんとか持ちこたえた。砂押川が切れていたら八幡は全滅していただろう。歌枕「末の松山」を詠んだ歌にある通り、波は「末の松山」を越えなかった。

この辺りには4つか5つの井戸があり、たくさんの人が水を汲みに来た。もともと浜の砂地なので塩水の出る井戸もあるが、真水の井戸もある。

息子は警察官で、震災時には石巻の大川小学校に行っていた。沢山の方が亡くなった場所。同じ職業だったので、その大変さがよく分かる。